



TITLE:

京大広報 号外

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 号外. 京大広報 2000, 0004s: 843-850

ISSUE DATE:

2000-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196565>

RIGHT:



# 京大広報

(号外)

2000 4

## 目次

### 卒業式・学位授与式

卒業式における総長のことば	844
修士学位授与式における総長のことば	846
博士学位授与式における総長のことば	848

### 大学の動き

平成11年度卒業式	849
平成11年度修士学位授与式	850
博士学位授与式	850

### 医療技術短期大学部の動き

平成11年度医療技術短期大学部 卒業式・修了式	850
----------------------------	-----



平成11年度卒業式

## 卒業式・学位授与式

### 卒業式における総長のことば

平成12年3月24日

総長 長 尾 真

本日ここに、名誉教授の先生方、各学部長その他教職員の方々の列席のもとに卒業式を挙行し、新たに2,729名の皆さんに卒業証書を授与することができましたことは、私の心から喜びとするところであります。卒業生の皆さんおめでとうございます。

皆さんが小学校以来長く勉学を続け、栄誉ある京都大学を卒業する日を迎えることができましたのは、皆さん自身の努力もさることながら、背後にあって有形無形の犠牲を払ってこられた皆さんのご家族、その他の方々のおかげであり、この日にあたって、これら皆さんの恩人に対して感謝する心を持たねばなりません。

今年は紀元2000年、21世紀の幕開けがもう目前という年であります。しかし現時点になっても、日本の政治・経済ははっきりとした希望を見出せず、小学校や中学校において想像もできない凶悪な事件が起り、大学においても問題が山積しているという状況であります。毎日の新聞に教育に関する記事が出ない日はなく、教育は明らかに社会問題となっております。現代は誰も自信をなくし、信念を持ってない時代となってしまっているのです。情報はあまりにも多く、目まぐるしく変化し、何をよりどころにできるかを考える時間を人々に与えません。特に教育の問題については、しばしば全く相反する意見が主張されております。

小中学校の時点からゆとりのある教育をし、何を学ぶかについて選択の幅をもたせ、個人に合った教育をし、個性を伸ばすという主張があるかと思えば、小中学生の年代に自分の適性を自覚することはむづかしく、自分の学ぶべきことを適切に選ぶことのできる能力を期待することはできない、若い間に基本的な知識をしっかりと持たせておかねば考える能力を身につけることは不可能であるといった意見もあります。こういった場合、我々はいったいどちらを信じたらよいか分らず、かといってその中間のどこかにバランスをとって進む自信もないというのが実状であります。

大学においても教養教育の重要性がさげばれていますが、それでは教養教育とは何か、また諸君は大



学で十分教養を積んだかと問われてもはっきりとは答えられず、また答える自信もないというのが現実であります。そもそも教育は規格化された人間を作り出す過程ではありません。全ての学生にほとんど同じ知識、同じ能力、同じ考え方を持たせて卒業させ、企業に送りこめばよいといったことでは全くありません。大学ではほとんど勉強せず、遊んばかりいたが、社会に出てから成功したという人もいます。こういった現実があつて、教育ということについてなかなか確信のある考え方、プランを出せないのです。せんじつめれば、学生一般に適用できる教育という概念はほとんど成り立たず、個々の学生にとっての教育ということがあるのみと言わざるを得ないのであります。

そこで社会からは、大学は何をしているのだ、しっかりした教育をしていないではないか、大学をもっと改革すべきだといった議論がいろいろと出てきております。しかし、大学のかかえるこのような問題は大学だけで解決できるものではありません。たとえば入試方法を工夫することが必要であると言われていますが、特定の大学に希望者が集中するという現象があるかぎり、どのような工夫をしても満足のいく解決はできないでしょう。企業がほんとうに実力のある学生を見分けて採用し、能力のある人には高い給料を支払い、社内での昇進も実力に応じて行うようにすれば、学生はよく勉強するようになることは間違いありません。また大学卒でなくても、適材適所で活躍できるように企業や社会自体が変わっていくことも大切なのであります。

高等教育のあり方についての現在の最大の不幸

は、こういった状況の下で、政治や社会と大学教師、学生という三者の相互間に、お互いに対する信頼感が失われてしまっているところにあります。三者とも自分の考え方を明確に持てなかったり、一方的な考え方を相手に押しつけようとしたりしているとすれば大変不幸なことであります。それぞれが自分のできる努力をするところから出発し、相互理解の場をもうけ、相互信頼を回復する努力をしなければならぬと思います。

19世紀から20世紀の半ばころまでは、科学技術だけでなくほとんどあらゆる学問分野で、普遍性の追求こそが学問研究であるという普遍的理性への信奉がありました。そして学問とは普遍性の体系の構築であると信じられていたのであります。ところが20世紀の後半に入ると、世界には多様な民族・文化があり、それぞれに思考法、価値感が異なること、これを普遍的理性という立場で統一的に解釈したり、共通の場で比較することは原理的に出来ないといったことが広く認識されるようになってきました。つまり多元的価値の認識・尊重と一口でいわれる時代であります。人はこれをポストモダンの時代と言ったりもします。しかしその思想性は強固ではなく、荒っぽく言えば何んでもありの時代、相互批判可能性への努力の放棄、無責任といった臭いのする、思想というよりは一種のムードが支配する時代であるともいえるでしょう。そこで人々は迷い、将来への方向性を見失ったり、また目先のことだけを見、将来を考えることをしなくなったのであります。

普遍性を信じた時代はまた、批判的理性を学問・思想の中心においた時代でありました。これに比べれば、普遍性を否定したポストモダンの時代は明らかに精神が墮落しました。安易な妥協であります。今日の社会の混迷、教育の混乱はそのことを如実に示しています。我々はこの混迷を抜けだし、ポストモダンを超えて、批判的理性を回復し、精神を高めねばなりません。

ただ、モダンからポストモダンを経て、さらにそれを否定して進むとするならば、それは弁証法的なプロセスであり、来たるべき時代は弁証法的理性を不断に働かせて努力する時代というのが、想像される優等生的解答ではあるでしょう。しかしこれはあまりにも陳腐な答えであり、具体的にどうすればよ

いかを示してくれていないわけであります。またこれからの時代は、19世紀から20世紀にかけてのモダンの時代とはあまりにも違った社会環境、地球環境となりつつあり、そこでの時代精神は過去への単純な回帰といったものではありません。

これからの時代はますます複雑となり、何が起るか分らない、何が起っても不思議ではないと言われております。そのような状況に出合った時、皆さんはその場限りの対症療法的な対応をするのでなく、学問の根本にもどってよく考えることが必要であります。京都大学を卒業した皆さんこそ物事を根元的な立場に帰って考え行動することのできる人達であると考えます。そういった意味で皆さんは社会から期待され、また責任を担っているのであります。

したがって皆さんは、何が起るか分らない、といった受身的な考え方から脱皮し、何かを起してみせる、というところに進んで行っていただきたいと思えます。20世紀は非常に多くのすばらしいことを達成して来ましたが、また多くの矛盾を作り出し、多くの問題をかかえて新しい世紀に移っていこうとしております。21世紀を20世紀よりもより良い地球の世紀にするためになすべきことは山積しております。皆さんの若々しい力でこれらの問題を解決していくことが必要であります。そのためには何かが起るといふ観点でなく、何かを起すという立場に立たねばなりません。

学問はそもそも全てのことを疑うところから始まり、物事に対する批判的精神を養うこと、そして学問と実践、学問と社会を考えなおすことを要請しておりますが、こうして始めて、これから実践すべきこと、何かを起す力が出てくるのではないのでしょうか。それが学問的、思想的にしっかりした裏うちを持つことによって、我々は信念をもって物事を実行していけるわけであります。

そのために我々がくぐって来た20世紀後半のポストモダンという、いわば混迷の時代を克服し、新しい時代精神を確立しなければなりません。それには現実を直視しながら、100年前にくらべて一段と深まったレベルでの学問の普遍性を追求し、新しい意味でのモダンの時代を作り出していく必要があるわけであります。それはグローバルとローカル、普遍的原理と個別的文化、あるいは自然科学と精神科



学との共存とせめぎ合いの中から生れてくるものでありましょう。

皆さんはこれから社会に出て種々の困難な問題に出合うことになりますが、その時には大学で学んだ

学問的思考方に立ち帰って、そこから新しい力を引き出しただきたいと存じます。皆さんの将来を期待して私の饒の言葉といたします。

## 修士学位授与式における総長のことば

平成12年3月23日

総長 長 尾 真

皆さん、京都大学大学院修士課程の修了まことに  
おめでとうございます。列席の各研究科長、その他  
教職員とともに心からお喜び申し上げます。今年は  
1,870名の方々が修士の学位を取得されました。そ  
のうち外国からの人は113名であります。

皆さんの中にはひきつづいて博士後期課程に進む  
人もあるでしょうが、大多数の皆さんは社会に出て  
いくわけであります。小学校以来、実に18年間にわ  
たって教育期間をすごして来たわけですが、この修  
士修了という時点で、皆さんはそれぞれ自分の受け  
て来た教育、自分の行って来た勉強・努力というこ  
とについて振り返ってみてはいかがでしょうか。小  
学校、中学校が皆さんの人格形成にとってどのよう  
なものであったか、高校や大学、大学院が皆さんの  
物の考え方にとって持った意味、等を問うてみるこ  
とであります。

大学では、学生諸君に対して基礎的な知識を与え、  
物事に対してはいろいろな見方ができることを教え、  
自分で考え、判断し、責任のある行動ができ、  
適切に自己を表現できる能力を持った人物、さらには  
文化に対しても豊かな感受性を持った人物といった  
人間像を期待して教育を行っているわけでありま  
す。皆さんがこれから出ていく21世紀の社会は、国  
際化がより一層進み、諸外国との関係を考えずには  
生きていけない社会であり、大学院で研鑽した皆さん  
はそこで中心的な活躍をする人材でありますから、  
学問、知識、判断力だけでなく、英語などの外国語  
でも自分の考え方を明確に伝え、相手を納得させる  
表現力をもつことが期待されているのであります。  
皆さんはこのような期待に応えて、京都大学大

学院を巣立って行ってくれるものと確信いたしま  
す。

皆さんの修士課程の2年間は学部の4年間とは全  
く質が違っていたはずであります。学部の間はどち  
らかというと学問の体系、内容を学ぶということに  
重点があったのに対し、修士課程では自分が主体的  
に学問にかかわっていくという立場で研究を行って  
来たわけであります。自分の設定した課題に関連し  
た学問・知識を積極的な立場で学ぶとともに、様々  
な物の見方、研究の方法がある中で、ある方法を選  
択し、困難を克服しながら研究をすすめ、問題の解  
決に至ったかという得がたい経験をしたにちがいあ  
りません。

そのような経験を通じて諸君は物事を自分で考  
え、判断し行動することができるとい、はっきり  
とした自信を持ったことと思います。その自信が大  
切なのであります。

社会に出ますと、種々の解決困難な課題に遭遇し  
ますが、そういった時にも決してあきらめず、まず  
は徹底してその課題にかかわる状況を調べるので  
す。つまり情報収集であります。そして考えるので  
あります。これは研究において皆さんが取ったのと  
同じ態度であり、あきらめずに試行錯誤的にいろい  
ろと努力することによって、かならず解決を得るこ  
とが出来るのであります。そういった過程において  
最も大切なことは、やれば出来るという自信を失わ  
ずに頑張ることでありましょう。これは諸君の修士  
課程での研究の経験によって身についたといつてよ  
いでしょう。あるいは、そのような自信を持てるよ  
うになることが修士課程修了のための最大の要件と

さえ言えるのではないのでしょうか。正しい考え方をし、正しい信念をもって努力する限り、自分の考えられていることはいつかは実現できるのであります。

さて皆さんも新聞等で既に知っているでしょうが、小渕首相の私的懇談会「21世紀日本の構想」が去る1月に報告書を出しました。そこには種々の大切なことが指摘されております。まず、「戦後に日本は奇跡の復興と驚異の成長を遂げ、瞬く間に経済先進国入りした。日本は平和と安定と繁栄を手に入れ維持してきたが、この成功のモデルが逆にいまでは日本の活力を殺ぎ、その間に生れた既得権益と社会通念の多くが経済社会を硬直化させている。いま日本はこの成功のモデルを超えるモデルを探さねばならないが、世界のどこにも出来合いのモデルはない。日本の中から解決策を見出していかなければならない。日本の中に潜む優れた資質、才能、可能性を開花させることが成功の鍵である。その意味で日本のフロンティアは日本の中にある」とっております。

そして「21世紀の世界の主な潮流は、グローバル化、国際対話能力、情報技術革命、科学技術の進化、少子高齢化である。経済・科学・学術・教育などのさまざまな面で、制度や基準の汎用性と有用性が世界標準に照らされ、問われ、評価される大競争時代が到来する。説明責任を負い、意志決定過程を透明にしてスピードを速め、個人の知恵やアイデアをもっと大切に、個人の権限と責任を明確にすることが必要であり、先駆的な発想や活動に対して、先例、規制、既得権などの邪魔を許さない。そして失敗した時にはやり直しや再挑戦ができる社会を育てることである」とし、さらに「グローバル・リテラシーとして国際共通語としての英語による国際対話能力の重要性、情報技術によって情報活用の十分に出来る国と出来ない国とに分かれていくことの危険性とその予防、何のための科学技術開発かという根源的な問いが発せられねばならない今日の状況への警鐘、少子高齢化への対応として日本の社会に眠っている潜在力を最大限引き出すために、例えば女性の社会と労働への参画の機会を制度的に促すべきこと」などの指摘をしております。

そして、「上からの命令によって動く『統治』ではなく、上も下も共に共同して動く『協治』の時代

になっていくべきであり、そのためにも個の確立と新しい公の創出が大切である」と主張しております。特に「新たな『協治』という概念を築き、個を確立し、公を創出するには、これまでの日本の社会では十分に実現の場を与えられてこなかった自立と寛容という2つの精神を育てなければならない。自立した個人の、その一人一人の才能とやる気と決断と倫理観と美意識と知恵が国の骨格と品格、未来を作るのであり、寛容の気持ちと包容力を社会が持つことによって、個々人の特質と才能の違いを認め、それを伸ばし、社会全体としての適材適所をもっともよく実現することができるのである」としております。そして日本の努力すべき方向として、「先駆性、多様性、協治の実現のための具体的方策の提言、世界に開かれた活動を通じて国益を求めていくという立場の大切さ」を述べております。

この報告書はきれいごとを並べた、いささか空虚な内容のものであるという批判もありますが、大変大胆で革新的なものであることは間違いありません。「日本はこうあってほしい、日本をこうしなければならないという希望、覚悟を表明し、日本の志を論ずることによって、これまでの、国のあり方や国家像といったことを語るのが何か気恥ずかしいことであるかのような、時代遅れであるかのような気分が蔓延している日本の情性をうち破ろう」とし、国民各層の多様な議論をまき起そうというところに、その真の意図があるものと考えてよいでしょう。この報告書に対しては既にいろいろな意見が出されておりますが、21世紀の社会で中心的な活躍をする皆さんも、ぜひともこの報告書を読みなおし、それぞれによく考え、批判的な意見を出すとともに、将来に対する糧としていただきたく存じます。

皆さんの前途は無限に開かれています。無限であるということはあらゆる可能性があるということでもあります。それは逆にいえば何が起るか分らない全くの未知の世界が広がっているということでもあります。これまでの皆さんの20数年間の人生は、いわばきっちりと敷かれたレールの上をほとんど何の抵抗も受けずに走って来たようなものでありますが、これからどこにもレールの敷かれていないところを歩いていく人生であり、自分がこの方向だと確信する方向に向ってレールを敷いていくことが求

められている時代であります。

京都大学の修士課程を立派に修了することが出来たという自信をいつまでも持ち、自分の未知の人生

を切り開いていって下さることを期待し、皆さんの門出に対する饞の言葉といたします。

## 博士学位授与式における総長のことば

平成12年 3月23日

総長 長 尾 真

博士の学位を受けられた課程博士395名，論文博士104名，合計499名の皆様，まことにおめでとうございます。列席の各研究科長とともに心からお喜び申し上げます。

京都大学は近年年間に700～800名の博士を出しておりますが，特に課程博士の数が年々増加していることは大変喜ばしいことであります。皆様もご存知の通り，京都大学は大学院重点化大学であり，研究大学として国際的にも大きな存在感を与えている大学であります。毎年多くの外国人留学生を受け入れ，日本人の博士だけでなく外国人の博士を多数送り出して来ました。皆さんはそのような優れた大学で研究を行い，博士号を得られたわけであり，大いに誇りとすべきものと存じます。

博士号取得は皆さんの長年の努力の結果であります。それはもちろん皆さんの実力によるものでありますが，その間に指導して下さった教官や，いろいろと助言して下さった先輩，友人の方々に感謝しなければなりません。さらには，それぞれの研究分野のこれまでの先達のぼう大な研究成果の上に皆さん方の業績は築かれているわけであり，そういったことにも心を致すべきでありましょう。

皆さんは，それぞれこれから研究生活を続ける人，社会において活躍する人など様々なでしょうが，これまでとは立場が逆になるということをよく自覚する必要があります。すなわちこれまででは指導してもらって来たのに対し，これからは後輩を指導する立場になるということです。これまででは自分の研究のことだけを考えておればよかったのですが，これからは自分の研究だけでなく，他人の事も考えてあげねばならないのであります。他人を指導したり，他人に適切なアドバイスを与えるということは決して易しいことではありません。中でも最も

大切なことは適切な課題を与えること，あるいはもっと正確にいいますと適切な形で問題を設定してあげることです。

最近の若い方々をご存知ないかもしれませんが，岡 潔先生という数学者がおられました。奈良女子大学で教授をしておられた方ですが，多変数複素関数論の権威であり，クーザンの問題といわれていた世界的な数学の難問を解かれ，1960年に文化勲章を受章しておられます。この方が文芸評論家で1967年に文化勲章を受章した小林秀雄氏との対話の中で，ある年代までは数学の主要な問題を解くことに専念したが，それがほとんど出来てしまって，その後の目標として問題を作ることを考えていると話しておられます。「問題を出すということが一番大事なことである。問題をつくることは問題を解くことよりももっと難しい。うまく問題を出すこと，これがこれからの自分の仕事だ。」と言っておられるのであります。つまり，簡単には解けないが解くことに大きな意味がある，その問題に対する解法を考えれば他の領域にも大きな影響をおよぼす，その問題が解けることによって世界がいきよに広がり，学問が進展する，といった問題を設定することです。

皆さんは自分の博士論文のテーマをどのような考え方と経緯で選ばれたのでしょうか。そこでどれだけの事を考え，迷い，どれだけ多くの異った見方からそのテーマの妥当性を検討されたのでしょうか。研究の出発時点でのそのような深い検討が，得られた結果の質の高さに大きく影響していることは間違いありませんし，また出発時点でのそのような検討によって研究は半ば進んでしまっていると言ってよいかもしれません。ただ一方では，何んとなしに面白いからどんどんとのめり込んでやっているうちに，すばらしい事が達成されていたという研究歴の方も



おられるに違いありません。自分の心をわき立たせ、のめり込んでいける魅力をもった課題が自然に見えてくるということは幸運なことであります。しかしそのような幸運も常に広く深く学問をしていなければやって来ないわけであります。学問の世界においても、また社会においても、皆さんが次に見つけて挑戦しようとする課題、あるいは後輩に与えようとする課題が何であるかは皆さんの将来にとって最も大切なものとなるでしょう。

これと似たことは産業界において新しい製品を作る場合にも言えることであります。たとえば私の専門分野に近いことで、音声合成装置というのがあります。文字テキストを与えるとこれを音声に変換して自動朗読してくれる装置であります。これはまず米国ですばらしい質の装置が発売されました。そうすると日本の企業は、そんなのは我々も作れるといって、半年か1年後には同様の質の日本語音声合成装置を発売したのです。こういった事は他にも、枚挙にいとまがないほど多くあります。日本は情報技術で米国に何年も遅れているとよく言われますが、技術に携わっている人々からみると決して遅れているわけではないのです。日本の一流企業は世界一流の技術を持っているのです。それにもかかわらず、その技術を生かして良い独創的な製品につないでいくことが出来ないでいるのであります。

その根本原因は、企業の製品企画をする人達、あるいは部長、取締役クラスの人達が、新しい製品としてどのようなものが社会から期待されているか、技術的に可能かをよく考えてプロジェクトを起す力

がないところにあると思われます。あるいは考えていても上司を説得する力がないからかもしれません。これはまことに残念なことと言わざるをえません。実力を持つとともに、鋭い直感力によって新しい企画を行い、それを社会に対して問うというチャレンジングな精神を持つことが、これからの我々日本人にとって必要であります。

こういったことは国の科学技術計画においても言えることであります。たとえば米国の大統領情報技術顧問会議は、近未来の情報技術研究開発について、非常にシャープで具体的な提案をしております。そして研究開発資金を集中的に投入し、また民間活力がそこに集中するような政策を積極的に作っています。これに対して我が国では残念ながら総花的な提案しかできず、研究開発費もなかなか集中できないのであります。さらに問題なのは、プロジェクトをいったんスタートしたら、途中で評価して展望のないものを中止させる決断がほとんどできないことであります。

いずれにしましても、こういった状況を改善し、日本が学問の世界でも、また産業の世界においても、世界をリードしていくのはこれからの皆さんの力です。博士号を取得してからの数年間をどのように過ごすか、どのように皆さんの後輩を指導するかは皆さんの将来、日本の将来にとって非常に大切なことであります。博士号は終着点でなく、本格的な世界に入っていく出発点であるという意欲をもって進んでいただくことをお願いいたしまして、私のお祝いの言葉といたします。

## 大学の動き

### 平成11年度卒業式

3月24日(金)午前10時から、総合体育館において名誉教授をはじめ各部局長等の出席のもとに平成11年度卒業式が挙行された。京都大学交響楽団による式典曲演奏、京都大学合唱団による学歌斉唱の後、長尾 真総長から、各学部代表に学位記が授与された。

続いて、総長の式辞があり、最後に「蛍の光」を全員が合唱して、午前10時55分に終了した。

本年度の新学士は、総合人間学部129人、文学部200人、教育学部55人、法学部418人、経済学部256人、理学部299人、医学部97人、薬学部76人、工学部898人、農学部301人の計2,729人であった。



## 平成11年度修士学位授与式

3月23日（木）午前10時から，総合体育館において各研究科長等の出席のもとに平成11年度修士学位授与式が挙行された。

長尾 真総長から各研究科代表に，学位記が授与された後，総長の式辞があり，午前10時40分に終了した。

本年度の修士課程修了者は，文学研究科93人，教育学研究科42人，法学研究科45人，経済学研究科75人，理学研究科259人，薬学研究科76人，工学研究科590人，農学研究科262人，人間・環境学研究科141人，エネルギー科学研究科115人，情報学研究科172人の計1,870人であった。

## 博士学位授与式

3月23日（木）午後1時から，総合体育館において，長尾 真総長，両副学長をはじめ各研究科長等の出席のもとに博士学位授与式が挙行された。

総長から，各専攻分野の代表23人に対し学位記が手渡された後，総長の式辞があり，午後2時5分終了した。

各研究科別の内訳は，右欄のとおりである。

研 究 科	課程博士	論文博士	合計
文 学 研 究 科	13人	14人	27人
教 育 学 研 究 科	1	5	6
法 学 研 究 科	2	1	3
経 済 学 研 究 科	3	8	11
理 学 研 究 科	105	9	114
医 学 研 究 科	80	7	87
薬 学 研 究 科	13	2	15
工 学 研 究 科	92	33	125
農 学 研 究 科	45	21	66
人間・環境学研究科	22		22
エネルギー科学研究科	7	2	9
情 報 学 研 究 科	12	2	14
計	395	104	499

## 医療技術短期大学部の動き

### 平成11年度医療技術短期大学部 卒業式・修了式

医療技術短期大学部では，3月17日（金）午前10時から，本短期大学部講堂において来賓の出席のもとに，卒業式・修了式を挙行した。式は卒業証書・修了証書授与，学長式辞，来賓祝辞と進行し，午前10時45分終了した。

卒業生は，看護学科74人，衛生技術学科39人，理学療法学科17人，作業療法学科14人で，修了生は，専攻科助産学特別専攻19人の計163人であった。

